
What is a wonder aim?

Reckless

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

What is a wonder aim?

【Nコード】

N8011Q

【作者名】

Reckless

【あらすじ】

旅人達は、今宵も無謀な旅を続ける。個々の目的のため理想を追求し、または富と名誉を求め、もしくは好奇心に身を任せ、各地を渡り歩く。

その一方、夜という歯車を失くした世界は、歪に廻り始めてしまっていた。

無知なる旅人達は、それに巻き込まれていることさえ知らず。

——どうか、哀しき星達に、祝福のあらんことを——

序章へアンファンク

第九章 ― 夜行列車 ―

或る世界、夜の刻にて。

「綺麗な月ですね」

旅人は列車の窓から空を眺めていた。その顔には柔和な笑みが浮かんでいて、向かいに座る私も思わず微笑んだ。

「でも……」

しかし、不意にその表情が曇る。

「今夜が、最後だ」

旅人は悲しげな表情で私に向き直った。

私は怪訝に思い、旅人に何事かと尋ねようとした。しかし旅人は曖昧に笑い、気にするなと首を振るばかり。

仕方なく、私は黙った。

旅人も黙っていた。

今夜最後の列車は、私と旅人と、僅かな沈黙だけを乗せて疾走する。街を、野道を、まるで切り裂くように。

ふと、私は窓に目を向けた。列車は既に街を抜けていたようで、外には黒い海が広がっていた。

「ああ、そうだ」

突然、旅人が思い立ったように呟いた。

「貴方にはまだ、聞いていなかったな」

紅い瞳で、私を真っ直ぐに見据える。

そして、問うた。

「^{ワット イズ ア}貴方が旅をする理由は何ですか？」

それから幾日。

世界からは夜が消えた。

そして旅人とも、再び会うことはなかった。

――
『旅記 第

九章』 シュテルン

第一話「エアスト」

ψ フサイ ケンタウリ
Centauri ?

この街には、いつか来たことがあった。人通りが多すぎて、迷子になりそうになったのをよく覚えている。

けれどその記憶も嘘だったかのように、通りは人が少なく、酷く寂れていた。

しかも数少ない通行人は皆、独特で統一感の無い服を纏った旅人達。街人らしき姿はどこにも見当たらなかった。

しかし道の至る所にある酒場は繁盛しているようで、酒の匂いと喧騒を通りに振り撒いていた。

それは、昼とも夜ともつかない、奇妙な刻のこと。

人々が寝静まる、けれど、太陽が変わらず輝く頃。

レーヴェは人^{ひと}気の無い通りを、鳩舎を探し歩いていた。

『賞金首現る。外出時には警戒を』

よく見れば、街はそんな内容の広告が張り巡らされていた。

街人は広告にある賞金首を警戒し、血気盛んな旅人は賞金首を狩るためにこの街に出向いた。それがこの異様な静けさの原因だろう。しかしレーヴェは賞金首を狩るためにこの街に来た訳でもないし、勿論狩る気もない。

彼は、故郷に帰るための通過点として、そして故郷で待つ兄に手紙を届けるため、この街を訪れていたのだった。

しかし、手紙の配達を行う施設、鳩舎の場所が全く分からない。

誰かに尋ねるにしても、街人は見当たらず、こんな時間に旅人の多い酒場に入るのも、何だか気が引けた。しかも通りを歩く旅人達は、彼の姿を怪訝そうに一瞥してから通り過ぎる。

よく分からないが、軽々と道を尋ねられないことは確かだった。
困惑し、右往左往していたまさにその時、

「こんな時間に、どうされましたかな？」

突然、背後から囁れた男の声が響いた。

レーヴェは弾かれたように振り返る。その顔に浮かぶのは、緊張と驚愕。

男は、すらりと伸びた瘦躯に仕立ての良さそうな背広を着込み、灰色の髪を後ろに撫でつけた、まさに中年の紳士、という姿をしていた。

しかし男が放つのは人間の気配ではなく、どこか獣のような気配。それに加え、黒光りする革靴は些細な足音さえ立てない。それらがレーヴェを本能的に警戒させていた。

「どうかされましたかな？」

難しい表情になったレーヴェを見兼ねてか、男は柔らかに微笑んだ。それと同時に、異様な気配が溶けるように消えていく。

そして、レーヴェの持つ手紙に視線を落とすと、

「鳩舎をお探しかな？宜しければ、案内しましょう」

そう言つて、もう一度上品に微笑んだ。

「へ……？」

レーヴェは不意をつかれたようにたじろぐ。体の緊張が解かれて、がたりと肩が落ちた。

「とは言つても、私の家が鳩舎なんですがね」

男は自嘲するように肩を竦めると、呆然とするレーヴェには構わず、通りを歩き出す。革靴が煉瓦を踏む音が、辺りに軽く響いた。

「遠慮なさらず。私は家に帰るだけなんでね」

男は振り返り、ついてくるよう促した。

そしてまた踵を返し、さつさと歩いていく。

レーヴェは少し迷ってから、離れていく男の背を小走りで追いかけ、肩を並べた。

「君は旅人かね？」

しばらく歩いたところで、男は簡単な問いを投げかけた。

「その髪の色は、この街には珍しいのでね」

言いながら、レーヴェの漆黒の髪を興味深そうに見つめる。

一方、レーヴェは男の穏やかなオリーブ色の瞳を横目で見つめていた。憂いを帯びたその瞳からは、微かな表情さえ窺えない。

「そうですよ」

だから、一言だけ答えた。

「やはりそうでしたか。ならば通りを歩く旅人の態度も納得がいきますな」

「そういえば、さつきから旅人達に怪訝な顔をされるのですが、一体何なんですか？」

レーヴェはわざとらしく、きよろきよろと辺りを見回してみた。

案の定、旅人達は怪訝な表情でこちらを見ていて、目が合うといかにも自然な動作で視線を外す。

レーヴェは男に向き直って、肩を竦めて見せた。すると男は静かに笑って口を開く。

「それは君が黒髪だからだろう」

「色が問題なら、旅人はほとんど黒い外套を纏っていますよ？」

「問題は年齢なのだよ」

「年齢？」

男の予想外の言葉に、レーヴェは首を傾げた。確かに未成年の旅人は珍しいが、それだけでは腑に落ちない。

一方、男は難しい表情を浮かべたレーヴェを、さも面白そうに見つめていた。その瞳に一瞬だけ、挑戦的な光が灯る。

やがて道が開けて、小さな広場に出た。

そこは古びた噴水と、それを囲む花壇だけが置かれた、質素な野外休憩所のような所だった。

「年齢は十五、十六程。夜色の外套を纏った旅人が、もうじき正式に賞金首となる、という情報がありましてな。君の髪は夜色に限り

なく近い。だから旅人達も知らずの内に警戒しているのでしょうか。さて、着いたようですぞ」

男が歩を止めた。それに続いてレーヴェも歩を止め、顔を上げる。そこにあつたのは、大きいとも小さいともれない木造の建物。中からは鳩の鳴き声が騒がしいほど聞こえてきて、それが鳩舎であるとすぐに分かった。

男はすたすたと扉に歩み寄り、慣れた手つきで鍵を開ける。そして開くと、レーヴェに目配せをし、先に入らせた。

「では記入書を持ってきましたのでね。そこに掛けていて下さい」

男はそう言い残して、鳩の鳴き声が木霊する奥の部屋に歩き去っていった。

レーヴェは男の指示通り簡素な椅子に腰掛け、辺りを見回してみた。

殺風景な部屋だった。ほとんどが同色の木材で造られているらしく、ほんのりと木の良い匂いがする。

「あれは……？」

ふと、広告が無造作に張り付けてある、掲示板に目が止まった。市場の知らせやイベントの案内、求人広告、そして賞金首の写真と情報。

それは街中に貼り巡らされていたものと同じで、柄の悪そうな三人組の男の顔写真と、莫大な金額が載せられている。

しかしその隣には、更に莫大な金額の書かれた紙が貼られていた。不審に思い、近寄ってみる。

『凶悪賞金首現る。迅速な討伐を求む。特徴は、灰色の長髪』

それだけが書かれたその紙には、顔写真は愚か、後ろ姿の写真さえ載っていないかった。

「おや、どうされましたかな？」

レーヴェが怪訝な顔で掲示板を見ていると、突然背後から男の声がかかった。

「記入書を持ってきたのでね。書いて頂きたいのですが」

「ああ、すみません」

レーヴェは苦笑しながら椅子に座ると、男の差し出した羽ペンを握り、紙に走らせた。

「ほう。アンファンングとな。帰還を知らせるのですかな？」

「ええ、兄が居るので。あの村にも鳩舎があつて助かつてますよ」

「そうですね……。最近は便利になりましたな。どこにでも鳩舎があるおかげで、どこにでも手紙を送れる」

「全くです」

レーヴェがペンを置くと、男は紙と手紙を受け取り、奥の部屋に入つていった。

しばらくして、羽ばたきと共に一羽の鳩が飛び去つていった。

レーヴェはそれを窓から見届けると、立ち上がり、戻つてきた男に向き直る。

「じゃあ、俺はもう行きます。有り難う御座いました」

軽く会釈をし、踵を返して、扉を開く。

「また何かありましたら、ご利用下さい」

男は、扉の閉まる直前に言った。

ばたん、と、扉の閉まる音が控えめに響き、やがて部屋には沈黙が訪れる。

「あの少年……私の気配に気付くとは、なかなか見込みがある」

そんな中で、男は一人不敵に笑っていた。

強い風が吹いて、窓ががたがたと悲鳴を上げる。

その隙に入り込んだ隙間風が、男の束ねられた長い髪を揺らしていた。

第二話へッヴァイト

ミュー
μ アクアーリイ
Aqua r i i ?

暗夜の森。

畏怖の念を込めてそう呼ばれる森は、街からさほど遠くない場所にある。

けれどそこは名の通り、常に奇妙な仄暗さに支配されていた。それに便乗するように木々をざわめかす風も、人々の恐怖を煽るには丁度良い。

なので当然のことながら立ち寄るものは誰一人としておらず、そこは迂闊に街に立ち入れない者達の、潜伏場所となっていた。

例えば、首に多大の賞金がかかった、重罪人。

「そこにいるのは、誰？」

少女は無表情のまま、一步を踏み出した。さく、と、草が鳴り、風は悲鳴を上げ、彼女の長い亜麻色の髪をぞんざいに巻き上げる。

「誰？」

相変わらずの無機質な声で、もう一度問いかけた。

すると木が突然、不自然にがさがたと揺れ始め、下卑た笑い声と共に三人の男が姿を現す。

「よく分かったなあ、お嬢ちゃんよお？」

男達は少女を取り囲み、もう一度げらげらと下品に笑った。

しかし少女は表情を変えず、ただ呆然と男達を見ているだけ。

「通りかかったところを襲うつもりだったか…まあいい」

リーダー格のような男が、がさつな動作でナイフを引き抜く。刃先が奇妙に煌めき、透明な雫が飛び散った。どうやら毒が塗ってあるらしい。

そして、品定めをするように少女を見ると、齒を剥き出して、叫んだ。

「死ねえっ!!」

馬鹿だ。どうしようもなく馬鹿だ。

死ぬのはお前等——賞金首だというのに。

少女は迫り来る男を見据え、嗤った。

それは、昼とも夜ともつかない、とても奇妙な時間のこと。

人々が寝静まる、けれど、太陽が変わらず輝く頃のこと。

デルフィは賞金首を狩るため、森へと出向いていた。

辺りに散るのは真紅の鮮血と、ナイフを持ったまま横たわる人の腕。

「ぎゃああああッッ!!」

男は無くなった片腕を見て、激痛と驚愕が入り混じったような叫び声を上げた。そして大量の血を流しながら、草の上をのたうつ。

デルフィは鮮血に濡れた二本の短剣を握ったまま、男の様子と、先程切り飛ばした腕を冷やかな眼差しで見下ろしていた。

まったく、滑稽なことだ。

他の男達も、怯えた目でこちらの様子を凝視している。先程の威勢の良さは、一体どこへ行ったのか。

「おお、お前……ま、まさか……」

のたうち回っていた男が、掠れた声で言う。痛みを忘れるほどに戦慄し、顔を恐怖に引きつらせ、じりじりと後ずさった。そして、見開いた目でデルフィの瞳を凝視する。

澄んだ翠と、漆黒。加えて、少女とは思えない程の腕力。それは賞金首達には悪名高い、恐れるべき凄腕賞金稼ぎの姿。

「き、気をつける!! もう一人居」

言いかけた男の喉元に、突如矢が突き刺ささった。

おびただしい血が吹き出し、辺りに濃い血の匂いを充満させる。やがて男は喘ぐ間もなく、簡単に事切れた。

もう一人居る。そう告げようとした男の判断は、なかなか賢明だったといえるだろう。けれど、そのもう一人に殺されてしまったのは、元も子もない。

「寝てろ」

まるで吐き捨てるような、もう一人の声が響いた。

デルフィはその声を合図とするように、剣を振って血をきり、残った二人の男に目を向ける。

彼らはもう一人——少年の声を聞きやっとな理解したらしく、今更顔を青くして大袈裟に震えていた。

「ヴァール、降りてきて」

デルフィが息吐く。すると背の高い木から、小さな少年が姿を現した。

亜麻色の髪に、漆黒と翠のオッドアイ。デルフィと瓜二つの外見ではあるが、まるで鏡のような対称性がある、不思議な少年だった。「し、賞金稼ぎ、デルフィとヴァール……！？」

もはや痙攣のように震える男達を尻目に、デルフィとヴァールは互いに一瞥した。そしてデルフィは短剣を、ヴァールは弓矢を音もなく構え直す。

ひょう、と風が吹き、木々を騒がしく蠢かせた。

瞬間。

片方の男の首が宙を舞い、もう片方の男の額に矢が貫通した。おびただしい紅がしぶき、噴き出し、男達は驚愕の表情のまま絶命する。

けれどデルフィとヴァールは返り血一つ浴びず、相変わらずの無表情で佇んでいた。

「じゃ、報告に行こうか」

「うん。これであの街も賑やかに戻るね」

二人は顔を見合わせ、笑う。先程人を殺めたとは思えない、無邪気な笑みだった。

そして武器を納め、死体をそのままに、血の香に満ちた森を後に

する。

その後ろ姿は、お使いを終えて家に帰る、ただの仲の良い双子のようだった。

第三話へドリット（前書き）

先日、感想、アドバイス等下さった方へ。

この場を借りてお礼申し上げます。
本当に有難う御座いました！

第三話〈ドリット〉

フサイケンタウリ
ψCentauri?

昼時の酒場は、夜の刻より遙かに寂れている。

それは旅人の中に、夜時、いわゆる、辺りに街人や村人が少ない時刻の方が、仕事上効率が良いと言う輩が多いからだろう。だからこの現象は、旅人にとっては日常茶飯事だった。

けれど、今回はそれに加え、街に恐怖を撒き散らしていた賞金首が捕まった、或いは殺された為、流浪の賞金稼ぎ達が街を後にしたこともあり、酒場内の人数は更に少なくなっている。

いずれにしろ、酒の匂いを嫌うレーヴェにとっては、嬉しい光景にすぎなかった。

先程頼んだ水を飲み干して、机に置いた懐中時計を手取る。

細かな鎖、複雑な模様が刻まれた蓋、その全てが白銀色に輝いているのを眩しく感じながら、無造作に時計の上部を押した。

ぱかつ、と、軽い音をたてて開いた時計は、歯車を軋ませながら時を刻んでいる。けれどそれは少し狂っていて、本来の時刻より遅れていた。

「……またか」

ねじを巻き、針を正しい場所に戻してやる。すると針は何事も無かったかのように廻り、また時を刻み始めた。

両親の形見。

そう言われ、村を立つ際に兄から渡された時計は、勿論レーヴェにとって大切なものだ。けれど、同時に複雑な気持ちを起こさせるものでもあった。

両親は生きている、そう信じたい。否、信じている。

だからだろう、形見という言葉に、僅かな憤りを感じていた。
「水の追加、いるかい？」

無表情で時計を凝視するレーヴェに、脇からぶつきらばうな声がかかった。時計から視線を外し、そちらを見ると、無精髭を生やした店主の人懐っこい笑みが目に入る。

少し驚いたような顔を見ると、彼は歯を見せて笑いながら、水の入った　を掲げて見せた。

レーヴェは時計をテーブルに置くと、店主に笑みを返ししながら、「お願いします」

そう言つて、コップを手にとつた、まさにその時。

がつしやああんツ

突如轟音が響き、彼等の目前に木屑が舞い上がった。

木が軋む音を残して、店内が一瞬にして静まり返る。何かが酒場の屋根を突き破り、テーブルに着地したのだ。

誰もがその何かを凝視する中で、レーヴェは一人息を呑んでいた。それは、絶句する程に美しく、漆黒よりも黒い――

夜色。

そう呼ぶに相応しい色彩が、彼の目前を閃いていたのだつた。

「下だ――！」

今度は頭上から苛立った男の声と、複数の足音が聞こえた。見上げると、先程破られた穴から四人の男が顔を覗かせ、夜色――夜色の外套の人影を睨みつけている。

男達はロープはどこだ、武器を用意しろ、などと口々に言うだけで、なかなか降りようとしなない。

レーヴェはそんな男達の様子を見上げながら、無意識に懷中時計を手にとつた。

「ん？」

けれどざらざらとした妙な感触が指先に伝わり、手元に視線を移す。

そして、絶句した。

それと同時に人影がテーブルから飛び降り、出入り口に向かって駆けだした。その時、視界の端で何かが光ったような気がして、反射的に振り返る。

白銀の懐中時計だった。

それは人影の手に握られながら、太陽の光を反射してきらきらと輝いている。

取り違えたんだと思った。しかし冷静な思考は激しく脈打つ心臓と衝動に掻き消され、何もかもよく分からなくなってくる。

「ちよつと、君っ!？」

仕舞いには体が勝手に動き出し、人影を追って外に飛び出してしまっていた。

† † †

レーヴエは逃げていた。

どうしてこうなったのかは、自分でもよく分からない。

分かることといえば、人影を見失い、男達に追われているということ。しかも男達は疲れを知らず、なぜか武器を振り回して延々と追ってくる。自分を人影の仲間とでも思いこんでいるのだろうか。

とんだ冤罪だ。そう思いながらも逃げるしかない状況に、レーヴエはただただ疲れ果てていった。

「何なんだよ彼奴等……! うわっ!？」

背後を見やりながら吐き捨てた最中、不意に誰かとぶつかり、^{さなか}勢を崩した。

なんとか転がりそうになるのを堪え、ぶつかった相手に軽く頭を下げる。本来は言葉で詫びるべきだろうが、近づいてくる追っ手を警戒し、そのまま身を翻した。

その時、丁度前方に路地裏への入り口が見えてきた。

「しめたっ！」

思わず加速して、路地裏に飛び込む。

そこは思った通り人氣ひとけが無く、丁度いい具合に薄暗い通りだった。息を切らしながら、剣の柄に手をかける。

強引に振り切ってやろうと思っていた。四対一で不利ではあるが、問題無い。剣の腕には自信があった。

「ん……？」

しかし、細い路地裏の中に、更に狭い通りを見つけ、剣を鞘に収める。

壁に手を付けて中を覗くと、そこは様々な機械に邪魔され先がよく見えないが、僅かな隙間を縫っていけば向こう側に出られそうだった。

ここなら大柄な男達は入って来れない、というより、まず見つけれないだろう。

レーヴェは自身の運の良さに感謝しながら、嬉々として路地に飛び込んでいった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8011q/>

What is a wonder aim?

2011年3月23日21時10分発行